

越境型カンファレンスの場のデザイン研究 —「メディアリテラシー教育研究会」を題材に—

Development of Boundary Crossing Conference

- Based on the Cases of “Media Literacy Education” -

福嶋 俊

NPO 法人企業教育研究会

学校には独自の文化・価値観があり、社会とは切り離されているということが古くから指摘されている。しかし、近年、インターネットを始めとするテクノロジーの発展が著しい情報革命の中で、産業構造、及び社会構造が劇的に変化しており、現代的な社会課題に対応することが学校でも強く求められてきている。筆者らは、現代的諸問題に対処する教員の学習の場として、教師が教師だけで学習するのではなく、学生、企業人、メディア関係者など、多様なアクターとともに学習する場をデザインしてきた。本稿では、その手法を「越境型カンファレンス」と定義し、筆者らが主催する越境型カンファレンスの場のデザイン手法と、多様なアクターが参加することによる効果を明らかにした。

キーワード：社会とつながる、情報化社会、教師教育、越境、教員養成

1. 問題の所在

1.1. 社会の変化と教育

教育は社会変化の影響を受けて、その姿を徐々に変えつつ現在まで受け継がれてきている。

過去を振り返れば、明治時代に学制が敷かれ、学校が全国に普及して以降、フォーマルな学習の場が登場した。当時はまだ、家庭での教育熱はそれほど高くなく、就学率は現在よりも高くはなかった。しかし、高度経済成長期に専業主婦家庭が一般的な家庭モデルとして普及して以降、家庭での教育熱が上がり、全国的に教育への関心が高まっていった（広田 2001）。また、「教育ママ」という言葉がジャーナリズムで盛んに取り上げられる（本田 2004）など、教育熱が高まり受験戦争という言葉も生まれてきた。

産業構造の変化、それによる生活の変化を受けて、教育の姿は変わっているのである。

それにも関わらず、学校における活動は、教師と子どもとの関係性のもとに成り立っており、その活動が社会と切り離されていることは古くから指摘されてきた（Dewey 1957）。広田（2001）は学校の独特の空間について以下のように述べている。

教育(学)的な言説の歴史をさかのぼってみると、ある時期から「教育の自律性」や「教育の独自性」

がしきりに標榜され、行政的にも学問的にも、教育関係者はある種の「独自の世界」を創り上げてきた。

今も昔も、ある種の独自性を保っているのが教育の世界なのである。

しかし、近年の状況を鑑みると、その「独自の世界」が変化せざるを得ないと思われる。

近年われわれが直面している情報革命は、産業革命よりも圧倒的に早いスピードで社会を変化させている。半導体企業のインテルの創業者ゴードン・ムーアは「ムーアの法則」¹を提唱し、「あらゆるIT関連製品のコストは、年率30%か40%で下落していく」と指摘した。これは、既存の技術が進歩して新しい技術が生まれる中で、古くなった技術の価値が下がり、価格が急激に下落していくことを意味している。

こうした技術革新が頻繁に繰り返され、それが市場に反映されるようになった結果、われわれの生活は数年でめまぐるしい進歩を遂げているのである。フロリダ（2007）も、現在の経済システムの根本的な変化によって、私たちの働き方、時間、ライフスタイル、レジャー、帰属するコミュニティの基準、私たちが築く個人的・家族的なアイデンティティも大きく変わっていることを指摘している。社会はいま、大転換期を迎えているのである。

では、この変化に教育はどのように対峙したらいいのだろうか。素朴には、教育内容の変化が考えられる。例えば、現代的課題としてメディアリテラシー教育、国際理解教育、環境教育などの充実が求められることが多いが、こうした新たな教育内容は社会の変化によって生まれてきたものであろうし、今後もこうした変化に対応して、学校は教育内容を作りかえていく必要があるだろう。

1.2. 教師の学習環境

こうした社会構造の変化に適応できる教師を育成し、支援すると考えた際に、現在の研修・教員養成システムはこの問題に対処しうるのだろうか。教師の世界では、公的機関がアレンジする研修に参加したり、民間教育団体が主催する研究会で授業のノウハウを学んだり、教師同士で仕事の振り返りを行い、技術向上をはかる取り組みが積極的に行われてきた。

ところが、既存の研修は、参加者が教師のみで構成されていることがほとんどである。例えば、授業をテーマにした研究会で、授業に携わる人以外の話を聞くことがあったとしても、その学習集団は教師のみで構成され、教師の実践的知識・技術を獲得することが目的であることが多い。

しかし、現代的な社会課題に共通するのは、教師の専門性だけで解決できない問題に溢れているということである。酒井（2009）は、教師の専門性について、既存の「教師-生徒」関係や「学校-社会」の関係では捉え切れない問題群を扱うことを余儀なくされており、教師の専門性をこれまでの「授業デザインの専門家」に限定できないことを指摘している。

「授業デザインの専門家」としてだけでは対処できない問題群が噴出しているのだとすれば、教師は学校外のリソースを活かし、専門家の力を借りつつ学校という枠組みを超えて授業をデザインする必要性に迫られているのではないだろうか。こうした視点から、現代的な課題に対処する教師に必要な能力を捉え直してみると、学校の枠組みを超えて様々なアクターと結びつき、共同で問題解決できる能力が必要となるだろう。

本稿では、こうした新たな教師の専門性を育む場として、教員、企業人、学生、研究者など多様なアクターが共同で一つの問題について検討していく手法を提案する。稲垣（1995）は、教師が様々な他者から授業のフィードバックを受けて自身の授業を内省するプロセスを授業カンファレンスと呼んだ。この授業カンファレンスの形を拡張し、教師が多様なアクターとともに学ぶ場として、筆者らの提案する学習スタイルを「越境型カンファレンス」と定義し、論を進めていく。

ビジネスパーソンの職場を越境した学習については、中原（2010）が、職場学習を量的に考察した著書の中で、職場外学習にもふれ下記の仮説を提唱している。

人や組織社会化がある仕事に関する熟達化をある程度成し遂げ、組織創造性（Organizational creativity）やイノベーション（Innovation）を生み出すことが期待される頃には、ここで取り上げた社内外の人々との異種混交のかかわりを通した視野拡大などが、重要なリソースになるのではないか。

この指摘は職場外学習の壮大な展望であるが、実際、職場外学習については様々な角度から研究が行われている。荒木（2009）は企業で働く個人を質的に調査し、職場を超える実践共同体と職場を行き来することでキャリア確立が促されることを明らかにしている。

一方、教師の職場外学習については、酒井（2007）がメディアリテラシーの実践的知識獲得を目的としたオンライン学習プログラムを作成し、その効果を実証している。筆者ら（2011）も、越境型カンファレンスである「メディアリテラシー教育研究会」についての報告を行なっている。しかし、教師の職場外学習、すなわち越境型カンファレンスのデザイン手法に関する考察は行われておらず、越境型カンファレンスをデザインするための実践的な知は共有されていないのが現状である。

2. 目的

本稿では、越境型カンファレンスの一つである「メディアリテラシー教育研究会」という公開研究会を事例として、1）越境型カンファレンスのデザイン手法を分析し、2）研究会のプロトコルを読み解くことによって、教師が多様な人とともに学ぶことの意義を考察していく。そこから、越境型カンファレンスをデザインする際に有用な知見を明らかにすることを目的とする。

3. 「メディアリテラシー教育研究会」とは

ここでは、越境型カンファレンスの一つの事例として筆者らが主催する「メディアリテラシー教育研究会」²をとりあげる。「メディアリテラシー教育研究会」は2000年から継続して行われている研究会で、メディアリテラシー教育に関する有用な知見を引き出すことを目的に、教師やメディア関係者、学生など様々な参加者とともに、メンバーは流動的ながらも活動を続けている。少ない時には参加者が数名ということもあったが、現在では平均して20〜40名程度の参加者が集まる研究会となっている。

2011年に開催された研究会の概要は表のとおりである。

表1 「メディアリテラシー教育研究会」概要

開催	題目	講師
4月	西田さんと経済学	西田成佑氏
5月	海外のネットいじめの現状とその対策システムについて	青山郁子氏
6月	パチンコ依存症の実態	若宮健氏
7月	生きづらさを取材すること	洪井哲也氏
10月	育児雑誌から見た親子関係	猪熊弘子氏
11月	母親の社会的孤立防止としてのギャルママサークルの存在	新津幸氏 他3名
1月	ソーシャルメディアによるライフスタイルの変化から考える未来の教育	玉置沙由里氏

2011年は東京都内の公立中学校を借りて開催してきた。筆者らと交流のある公立中学校の先生のご好意で場所を提供してもらっている。都心部に位置する中学校で開催しているため、参加者は都内在住の方が多いが、長野、島根、兵庫、熊本など遠方からも参加者が集まっている。

遠方からの参加者が多いことの理由の一つに、ソーシャルメディアを使って研究会の告知、実況中継を継続的にこなっている³ことがあげられる。本研究会では、Twitterによる実況中継によって感度の高いインターネット上の参加者が集まり、ネット上でも議論が行われている⁴。実際、インターネット上であげられた質問に会場で答えるなど、インターネットから参加できる環境を整えている。こういった研究会の特性上、インターネットを通して関心をもった参加者が遠方から参加するということも珍しくない。

会費は大人1,000円で、学生無料である。そのため、学生の参加者も一定数いる。以上が、研究会の概要である。

4. 越境型カンファレンスの場のデザイン

ここからは、越境型カンファレンスの場づくりについて論じていきたい。コンセプトやタイムテーブルなど、筆者らが意識的に行なっている場づくりの手法について、具体的に記述していく。これから場づくりを行なっていく方の参考になるような実践的な技術を提供していきたい。

4.1. 基本コンセプト

越境型カンファレンスの特徴は、教員、企業人、学生、研究者など多様なアクターが共同で一つの問題について検討していくことにある。これまで一般的に行われていた教師の研究会の場のデザインを図で表すと、図1の

ようになる。

教師の学習は、基本的には教員世界に閉ざされたものである。学校における授業検討会や、研究会などを担う講師も、そこで学ぶ学習者も教員世界の人間であることが多い。

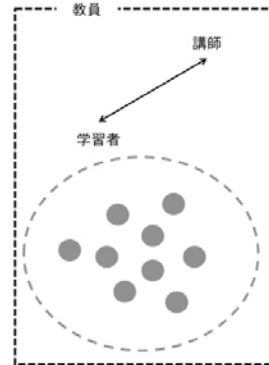


図1 教師の学習モデル

民間教育運動のモデルなどを見ても、教師が能力の高い教師からわざを伝授してもらうというように、基本的に図1のモデルに当てはまることが多い。学習の場自体が、教員文化に閉ざされているのである。

一方で、筆者らの提案する越境型カンファレンスモデルは図2のような形になっている。

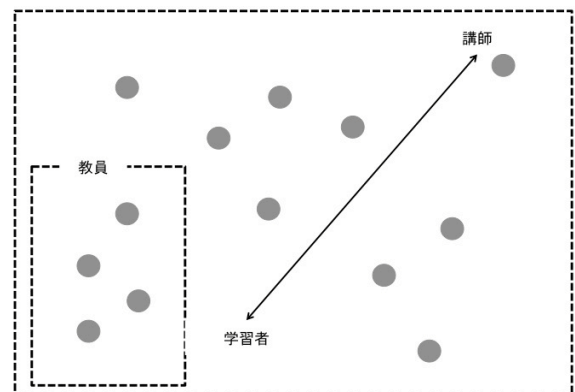


図2 越境型カンファレンスモデル

このモデルの1つ目の特徴は、学習者と講師との間の距離が遠い、言い換えると文化差があるということである。越境型カンファレンスモデルでは、教員が普段あまり身近に感じられない内容をテーマとして設定し、講師を選んでいる。

例えば、本研究会で扱っているギャルママサークルの存在やソーシャルメディアの活用などといったテーマは、学校の文化とは異なった文化をもっており、単純には理解がしがたいものである。しかし、普段理解し難いものへの理解をいかに深めるかに焦点をおいているため、越境型カンファレンスではあえて文化差のある講師

を選んでいく。

4.2. タイムテーブル

よく講演会では、参加者が講師のありがたい話を拝聴し、参加者は言葉を発することなく帰るという場のデザインが一般的である。学会やシンポジウムの企画、パネルディスカッションであっても同様のことが多い。しかし、自分自身と対象との関係を捉え直すことを学びとするのであれば、参加者自身が考えたことを講師に対して質問し、他の参加者からの意見を聞くということに時間を割くべきであろう。その中で、学習対象に対する自分の立ち位置を確認していけるはずである。このコンセプトに基づき、越境型カンファレンスでは、表2のような時間設定にしている。

表2 「メディアリテラシー教育研究会」進行表

時間	内容
5分	趣旨説明
15分	参加者自己紹介
60分	講演
15分	休憩
80分	質疑応答
5分	まとめ、次回告知
終了後	懇親会

まず、司会者である筆者から会の概要説明を行う。ここでは、なぜこの研究会でこのテーマを扱うのかということの説明をしていく。そして、参加者に自己紹介をしてもらうよう促していく。参加者が数十人になると自己紹介だけで相当な時間を使うことになるが、講師が参加者の属性と関心を把握すること、参加者が他の参加者の属性を把握することで自分自身の立ち位置を認識すること、この2つを意識して自己紹介を行なっている。

自己紹介が終わると、講師が自己紹介をし、講演をスタートしていく。時間は約60分。多少前後することはあるが、講師はだいたい60分程度で話を終える。そこまで終わると、司会から、休憩をしてその後質疑応答に移っていくことを告げる。

休憩を終えたら質疑応答に入る。司会からは「質問がある方は手を上げてください。順番に講師に答えてもらいます。」と告げる。そこからはノンストップで質疑応答終了まで講師と参加者との対話が続いていく。

4.3. 筆者の立ち位置

ここからは筆者の立ち位置を明らかにした上で、筆者が越境型カンファレンスの場のデザインにおいて行なっていることを記述していく。筆者が行なっていることは極めて個人的な営みであるため、それ自体がデザインの一般化に価値をもつものではないが、越境型カンファレンスのデザインの事例を分析するためにも筆者が行

なっている行為をできる限り客観的に、詳細に記述していく。

筆者は、教員養成系学部を卒業してNPOに勤務している。筆者が所属していた大学では教員になる学生が多く、筆者の知り合いや友人には教員をしているものが多い。そのため筆者自身は、教員文化に染まっているわけではないものの教員文化ともかけ離れてはいない、という微妙な立ち位置にいる。

また筆者は研究も行っており、研究の世界にも片足を入れている。学校文化、研究者文化、NPOをはじめとする民間文化を横断しており、それぞれにアイデンティティをもっている。これは筆者の特徴だろう。

越境型カンファレンスにおいて筆者は、1)企画立案、2)講師選定・依頼、3)告知、4)司会進行、を担っている。ここからは、この4つの役割を筆者がどのように行なっているのかを記述していく。

1) 企画立案

企画立案は主に筆者が担っており、筆者が関心のある分野で教育との関連が深いテーマを考え、そのテーマに相応しいゲストを探していく。筆者は子育てに関する研究を行っており、子育てとメディアとの関係、依存症とメディアとの関係などに関して興味をもっている。そういった関心と教育現場の実情とを照らしあわせながらテーマを選択していく。

2) 講師選定・依頼

企画に基づいて講師を選定していく。講師は、企画に適した人を選んでいくことになるが、主に筆者のインターネットを含むネットワークを用いて探していく。面白い情報を発信している人がいれば、人から紹介してもらったり、メールを送ってアプローチしたりして、講演依頼をしていく。

インターネットを含むネットワークと書いたが、インターネット上で情報発信している人を見つけるために筆者は主にTwitterとRSSリーダー⁵を使用している。Twitterでは筆者が良質と感じる情報と発信するユーザーをフォローして情報収集し、RSSでは日々更新される記事などから最新の情報や話題のトレンドなどを把握していく。RSSは、インターネットサービスの一種であり、ブログなどの情報発信サイトを登録しておくことで更新状況がわかる仕組みになっている。これらのサービスを用いて、良質な情報を発信している人を常に確認し、企画しているテーマに合う講師を選定していく。

時には、もともと私が出会ったことのない講師に講演を依頼することもあるが、その時に重要となるのが、筆者が実名・顔出しでインターネット上でも情報発信を行なっている⁶ことであると考えられる。

講演を依頼される相手からすれば、筆者は出会ったことのない異質な他者であり、信用するためにはある程度

筆者の情報を仕入れ、筆者が信用できる人間かどうか判断する必要がある。筆者は Twitter やブログを使ってインターネット上で情報発信を行っており、筆者の名前で検索をかけると筆者の活動に関する情報がでてくる。ある講師は、所属団体や筆者自身が信頼できそうだとインターネット上の情報で判断できたから講演を受けたと筆者との対話の中で話しているが、筆者の情報がインターネット上で可視化されていることがある程度の信頼を担保したと考えられる。

依頼する筆者も、相手の情報は入念に調べている。ブログを書いている人であればブログは過去から遡ってほぼ全て読み、著書があれば著書を読んでその人の主張を解釈する。もちろんアプローチした結果反応がないこともあるが、アプローチする際には、情報提供者である相手に対して、情報を受けて自分が何を考えたのか、その情報と教育にはどのような関係があるのか、筆者らの研究会で何を期待するのかを明らかにした上で依頼をしている。

そこまで引き受けてもらえるようであれば、60 分程度の講演を講演者に依頼することになる。

3) 告知

告知は主に、インターネットサービスを用いて行っていく。通常は、告知用インターネットページを作成し、その内容を掲載したメーリングリストを過去参加者に流し、Twitter や Facebook などでも情報を拡散して参加者を募る。

通常 1 週間から 2 週間前に告知を開始し、参加者を募っていく。また、大学の講義などを通じて学生へ告知されることもあり、その告知をもとに学生が集まることもある。この役割に関しては、筆者は元の案内文を作成するだけで、その他の役割は他のメンバーが担当することが多い。

4) 司会進行

当日の司会進行は筆者が行う。司会は進行、会全体のマネジメントを行うが、主に質疑応答においてその役割を担う。通常、筆者の他にも主催者側の参加者が 4〜5 名いるが、基本的には筆者を含めて主催者側で議論の流れを作ることにはしない。参加者に発言権を与え、参加者の関心にそって議論を展開していく。当然、参加者からの質問が活発にならないこともある。その時のために筆者の方でも事前にある程度関連しそうな議論を把握しておき、議論したいポイントを提示することもあるが、基本的には筆者らの発言は極力抑え、参加者の発言を優先するようにしている。

これは、通常の講演会やシンポジウムなどの「場」が参加者、すなわち学習者の目線で作られていないことに対するアンチテーゼでもある。参加者にも発言してもらい、その発言をもとに議論を作る。会の進行という役割

を、参加者にも担ってもらっているのである。

以上が、越境型カンファレンスにおいて筆者が行っている行動の詳細記述である。

5. 考察

ここからは、第 34 回「メディアリテラシー教育研究会」「母親の社会的孤立防止としてのギャルママサークルの存在」のプロトコルを参照しながら、多様な参加者がコラボレーションすることによってどのような学びが生まれているのかを明らかにしていく。

今回の講師は新津幸氏である。新津は、山梨で『ロマンティック・マザーズ・スタイル（以下：ロマスタ）』というギャルママサークル⁷を立ち上げ、現在でもその代表を務めるギャルママの草分け的存在である。様々な場所で講演を行ったり、イベントを企画したりしている。

今回はロマスタの新津に、60 分の講義をしてもらい、質疑応答では、実際にママサークルを運営するお母さん 3 名にも登壇してもらってギャルママの子育ての実情をより立体的に捉えられるような場の設定とした。

ゲストの属性は表のとおりである。

表 3 研究会ゲスト一覧

代表	サークル人数	特徴
新津幸	約 120 名	ライター、ママサークル代表。山梨県南アルプス市を中心に活動。
ゲスト A	約 40 名	サークルでは、食育に力をいれてママのための料理教室などを開催している。
ゲスト B	約 15 名	ギャルママモデルを目指すママ達を率いてサークル活動を行なっている。
ゲスト C	約 4,000 名	ギャルママモデル。大規模なママサークルの代表を務める。

5.1. 講師の話

新津の話の中心は、「母親の孤育て⁸を防ぐために地域の子育てサークルがどのような活動を行なっているのか」だ。具体的には、ロマスタの活動と、それが社会に与える影響について話をしてもらった。

ここからは、新津の話のポイントをあげていく。

ロマスタは、2007 年に設立したいわゆるギャルママサークルである。若いお母さん世代をターゲットにしており、「ママ達のママ達によるママサークル」をモットーとして活動している。2007 年に、ギャルママブームが起きたことでギャルママという単語が作られ、その存在が社会的に認知され始めた頃から、ロマスタの活動はスタートしている。

新津自身、子育てしはじめのころは子育て仲間がいなくて苦労したらしい。一人で子育てをしていると情報がない。予防接種はどここの病院がいいのか、図書館の読み聞かせはいつやっているのか、そういった情報が入ってこないのでは外にも出られない。だから仲間もできないという悪循環に新津は巻き込まれていた。

そんな新津を救ったのが、ロマスタとともに立ち上げるようになった一人の母親の存在である。その母親も同様に子育て仲間がいなかったため、新津を執拗に遊びに誘い、友だちになった。それ以降、ふたりは一緒に話したり遊んだりするようになっていく。

それからは、話し相手ができて子育てが楽しくなったと新津は言う。それが、ロマスタ立ち上げの原点であり、その友人とふたりでロマスタを結成して以降は人を巻き込んで様々な活動に取り組んでいくことになる。

普段、ロマスタは借りている古民家で活動を行なっている。母親達が集まることを、ギャルママサークルではミーツと呼ぶらしい。古民家でミーツを行ない、活動の方向性を考えたりイベントの予定を決めたりしていく。

ミーツとは、ミーティングの略語であるが、参加者はミーツという言葉初めて聞いた人ばかりで、誰も新津のミーツという言葉の意味を理解できなかった。筆者を含めてだんだんこの言葉にも慣れていくようになるのだが、分からない単語があればその都度確認をして単語の意味を理解しながら話進めていってもらおう。新津は、図3のようなスライドを用いながら笑いを交えて活動の様子を説明していった。



図3 講演スライドの一枚

サークルの紹介の後には、実際にサークルが行なっていることについて話してもらった。新津のサークルでは、母親たちを集めてイベントを行ったりしている。しかしそれだけにとどまらず、小学校における食育の授業を行ったり、地域の人を招いて餅つき大会をしたりと、母親だけを対象としないイベントを開催したりもしており、楽しそうに活動する様子が伝わってきた。

5.2. 質疑応答

質疑応答は、新津に加えてギャルママサークルを運営する3名にも登壇してもらい、質問に対してそれぞれの立場からこたえてもらうという仕組みで行なった。例えば、参加者からはまず浮かないのか？といった質問がでてきた。その質問に対して、ゲストCは以下のように回答している。

保育園の時はやっぱり結構若いママが多かったけれど、ぶっちゃけクラスには同じ格好の人はいません。旗当番⁹では他のお母さんと一緒になります。小学校3、4年生には人気があって、どうやったらそうなるのか¹⁰教えて欲しいと言われたりします。ギャルなんだからあげばよって言えば的なことを言われたりする。でもこのままでいたほうが他のお母さんと仲良く慣れたりする。こんな姿なんですけど、頑張りたいと思ってるのでいろいろ教えてください、と言えば親切に教えてくださいですね。爪すごいねとか言われたりするけど、この爪でもしっかりやりたいと思っていますと言うと、見習わなきゃねといわれたりします。

これは、ギャルママがギャルママ集団にいたらでてこない意見である。ギャルママの存在自体に違和感をもった参加者がいたからこそ出てきた意見であろう。

この意見に対して、教職員からは「あまり容姿には触れない方向で考えます」という意見がでたが、ゲストCは、「女子なので褒められると嬉しいので褒めてください」と回答している。

また、学生参加者からは、服にけるお金が結婚前と結婚後で変わったのかという質問がでてきた。その質問に対し、ゲストCは「ギャルはお金がないから安い服を着ている。ギャルに共通するのはお金がないこと。お金がない中でどう工夫して安くかわいく工夫するかを考えている」と延べ、ゲストBは今日のパンツは100円で買ったと証言している。

この服にけるお金の話がきっかけで育児雑誌の話が登場した¹¹。筆者からギャルママ雑誌の文字数が多く見にくいことを質問した際に、「ギャルはお金がないので、沢山文字が詰まっているとお得感がある」という回答がでてくるのだが、こういった質問を通じてギャルママの姿が次第に明らかになってくる。

ギャルママの姿、ギャルママサークルのあり方がわかってきたところで、教育研究をしている参加者からギャルじゃない人はくるのかという質問がなされた。若いギャルではない人はどうするのかという質問である。

新津はその質問に、良いのか悪いのかかわからないけどという前置きをした上で「普通の人もくる。だけど、だんだんとその人もキラキラしてくる。」と回答している。いわゆるギャルママではないと思っている人も、ギャルママのようなメイクを見ていくうちに、メンバーの影響を受けていくらしい。

ここで参加者の間では、ギャルママサークルに入るほどでもない若いお母さんはどうするのかという課題を

共有し始める。Twitterからの意見の中に「オタクママはどうするのか。」という質問が寄せられるが、ギャルママの現状を把握した参加者たちは今度別の課題に対しての問題意識を持ち始めることになる。

6. 成果と課題

越境型カンファレンスを開催することの一つの成果としては、様々な参加者が参加することで見方が多面的なり、対象への理解が深まることがあげられる。ギャルママとの対話を見ていくと、参加者の発言がもととなってギャルママの姿があらわになっていく様子が見て取れる。これは、対象の調査方法として一つ有効ではないかと考えられる。

また、ここでは越境型カンファレンスを行うまでの手続きを詳細に記述したが、越境型カンファレンスを行う際の具体的な手続きが共有されたことは、今後の様々な場づくりのために有効であろう。

他方、課題点としては、一つ目に主催者側がどこまで場を作り込むかがはっきりとしていない点があげられる。越境カンファレンスの特徴の一つは、自由度が高く参加者の意見を取り入れながら場を構成できる点にある。予期せぬ質問が、対象の理解のための意外な視座を提供することも少なくない。一方で、予期せぬ質問が出た際に主催者としてどのような対応をするのか、そのためどのような準備をすべきかなどといった点に関しては実践的な知は共有されていない。

越境カンファレンスの場づくりは自由度が高いのが魅力の一つであるが、ともするとまとまりがない会になる危険性もはらんでいる。そういったリスクに対して、主催者側はどのように対応するのか、あるいは場の作り込みに関する実践的な知が共有されていくことが今後求められるだろう。

中原 (2011) は、大人の学習について述べた著書の中で、ドライビングクエスチョン¹²が必要だと述べている。参加者に内省を迫るような質問を設定することが必要であり、そのために講師とのディスカッションを通して、プレゼンの中に思考を掻き立てる質問を入れるよう事前の準備をしているようである。そのことを中原は、参加者の学習体験をデザインすると述べているが、越境カンファレンスにおいて、参加者の自由度をどこまで許容し、事前にどこまで作り込むのか、といった点について今後探っていく必要があるだろう。

また、二つ目の課題として、研究会を通じて問題意識や仲間意識を共有した参加者同士のコラボレーションも生まれてきているがその詳細については明らかになっていないことがあげられる。実践共同体への参加を通じて緩い連帯をもった人同士が、一つのきっかけをどのように活用していくのかなど、長期的な効用についても今後検証していく必要があるだろう。

¹ 「半導体チップに集積されるトランジスターの数は約 2 年ごとに倍増する」という Moore の予測は現在「ムーアの法則」という名で広く知られている。

² 日本メディアリテラシー教育推進機構 (<http://jmec01.org/>) と NPO 法人企業教育研究会 (<http://ace-npo.org/>) が共同で開催する公開研究会

³ 簡易ブログサービス Twitter を用いて実況中継を行なっている。ハッシュタグ (#) をつけるとその研究会に関連する情報を一括して見ることができる。例えば、「#mle31」とハッシュタグを設定すれば、このタグがついた投稿に興味をもった参加者が、リアルタイムで議論を追うことができる。

⁴ Twitter 上で行われた議論は Togetter という投稿をまとめるサイトでもまとめられている。このまとめ機能を使うことによって、研究会後に議論を振り返ることができる。

⁵ RSS リーダーは様々な事業者が提供しているインターネットサービス。筆者は Google 社が提供する Google リーダーを使用して情報収集を行なっている。

⁶ インターネット上では匿名で活動する人も多い。2010 年に Twitter が流行してから実名で活動する人が増えたと言われるが、2012 年 2 月現在では匿名と実名の両方が混在している。

⁷ ギャルママサークルに明確な定義はないが、ギャル風の母親が集まって共同で子育ての問題解決を行う集団。服装やメイクなど、一見派手なスタイルをもつ人をギャルと呼ぶため、ギャルママサークルという言葉は一般的に使われている。

⁸ 一人で子育てをすることは「孤育て」と呼ばれている。2011 年には NHK で特集され、その言葉が広く知られることになった。

⁹ 朝の交通整理の際に旗を持つ様子を表現している。

¹⁰ ゲストは明るい髪の色をしており、子どもには異質なものと捉えられていると想像できる。

¹¹ ゲスト C は『I love mama』という育児雑誌のモデルを務める。本雑誌は、ギャル向け雑誌の一つである『小悪魔 ageha』のような雑誌を読んできた層が母親になったことを想定している。これらの雑誌は非常に文字数が多く、細かい文字が多いと筆者は認識している。

¹² 中原は、人が探求に値するような内省や思考を掻き立てる問いの設定をドライビングクエスチョンと定義している。

引用文献

- 広田照幸 (2001) 『教育言説の歴史社会学』、名古屋大学出版会
- 本田由紀 (2004) 『女性の就業と親子関係 母親たちの階層戦略』、勁草書房
- John Dewey (1959) 『学校と社会』、岩波書店
- リチャード・フロリダ (2007) 『クリエイティブ・クラスの世紀-新時代の国、都市、人材の条件』、ダイヤモンド社
- 酒井俊典 (2009) 「越境する教師」への教師の専門性再構築に向けての一考察-メディア・リテラシー論と高等教育の射程から-、『山形大学高等教育研究年報』第 3 号
- 稲垣忠彦 (1995) 『授業研究の歩み』、評論社
- 中原淳 (2010) 『職場学習論』、東京大学出版会
- 荒木淳子 (2009) 「企業で働く個人のキャリア確立を促す実践 共同体のあり方に関する質的研究」、日本教育工学会
- 酒井俊典 (2007) 「教師のメディアリテラシーの実践的知識獲得を支援するオンライン学習プログラムの開発」、日本教育工学会
- 福嶋俊・近藤麻紀子・関谷紳吾・藤川大祐 (2011) 「教師が越境する場づくりの成果と課題」-メディアリテラシー教育の実践をもとに-、日本教育工学会第 27 回全国大会
- 中原淳 (2011) 『知がめぐり、人がつながる場のデザイン 働く大人が学び続ける"ラーニングバー"というしくみ』、英治出版